第 11 回大会長賞受賞記念講演

歯科医師 高田光彦
（兵庫県　開業）

コンポジットレジンを用いた審美修復治療は象牙質への接着技術の向上が１９９０年代に発展したのに伴い急速に普及してきた。材料としては、色調豊かな商品が供給されているにも関わらず、依然として日本国内で行われているコンポジットレジン治療のクオリティは低いままである。その原因の一つは保険治療にコンポジットレジン治療が含まれるためであろう。その結果、コンポジットレジン治療はチープな治療として普及してしまったのかもしれない。

近年になり、顕微鏡治療の普及が進むにつれコンポジットレジン治療が再び見直されるようになり、かつて日本の技術力で世界に普及させた接着修復が逆輸入される形で日本でも”ダイレクトボンディング治療”として普及しつつある。しかしながら現状その治療の普及率は５パーセント以下、ましてや前歯部においてのダイレクトボンディングの普及率は３パーセントにも満たないと言われる。原因は多々あれど、自費治療として行う”ダイレクトボンディング”のクオリティを”保険の CR 充填”以上に維持することの難しさが大きな足かせになっているのではないだろうか。
また、補綴や外科治療のようにメソッドが確立されていないこともその原因の一つと思われる。メソッドを確立するためにはコンポジットレジン治療の手技が”科学的”すなわち”再現性”が高く、また”系統的”でなければならない。コンポジットレジン治療の成功率を上げるためには、”色調の調和”が取れていることと”研磨”が重要である。審美材料である以上色調の調和は必須であり、直接法での修復治療であるためマージン部の研磨に問題が残ると歯周組織への影響や二次カリエスのリスクを伴う。

今回、症例を提示しながら色調・研磨に重点を置いた”再現性”の高い”系統的”なコンポジットレジン修復の手技について再考したいと思う。